

Ronald L. Breiger (ed.)  
*Social Mobility and Social Structure*

(Structural Analysis in the Social Sciences, 3)  
Cambridge University Press, 1990, xii+364pp.

アメリカではO. D. Duncan, W. E. Moore, R. M. Hauserら階層・移動研究で有名な社会学者が、同時に著名な人口学者でもあるという例は多い。これは人口学が他のどの関連領域よりもまず社会学と強く結びついているアメリカの特殊性によるのかも知れない。そうっていないわが国の社会学者や人口学者から見れば、社会階層・社会移動研究を社会人口学の主要な課題とする考え方には違和感があるだろう。しかし人口の階層への分布とその間のフローは、素朴な見方をすれば婚姻状態別や地域別の人口分布およびその間のフローと形式的に同じ問題であり、わが国の人口研究者ももう少しこの領域に注目してもよいように思われる。

本書は「社会科学における構造分析」のシリーズに含まれるが、ここでいう構造分析とは、価値・理念といった抽象的概念の卓越性を拒否する一方、原子論的還元主義を排し社会的実在間の関係を重視するアプローチとされる。しかしこれが従来からの階層・移動研究に比べことさらユニークとは言えず、階層イメージや階層帰属意識に関する研究がないという消極的な限定が加わっている程度と考えた方がよいかも知れない。

Breigerの序文によると、第1部では具体的な社会構造を表す変数を地位達成分析に導入することが主眼とされる。確かに第2～第4章までは、下院における委員会の構造、工場の特性とリクルートの方式、地位の空白といった社会構造が取り入れられているが、移動率の計量問題を扱ったC. Jencksの第5章は異質である。DuncanとSiegelの尺度の比較に始まり、データを駆使してプロファイル評価に対する職業・学歴・所得の説明力、各指標の世代間相関と安定性などを論じているが、最後の移動と機会均等の関係についてはアイデアの提示だけに終わっているのが残念であった。これは属性原理と達成原理の報酬に対する影響力がゼロサムか否かという問題だが、それほどテスト困難な問題だろうか。

第2部は社会関係枠組の展開と称されるが、ネットワーク枠組のような明確に関係に焦点をおいた研究は見当たらない。J. A. Jacobsの第8章は労働市場分離の一種としての性別分離を扱っており、職業別就業者数に占める女子の比率により職業を「男優位」「中間」「女優位」に分類した場合、この3種間の移動はランダムに近いという、予想に反する結果が出ている。しかしこの分析では職業のランキングが無視されており、性的不平等の追究という問題関心に応えるものでないように思われる。

J. H. Levineの第9章は、あらかじめ設定された階層構造間の移動を分析するという発想を逆転させ、移動パターンを基準として階層構造を定義したらどのような像が描けるか、という興味深い分析をしている。結果としてBlau and Duncanによる従来分類とは異なる階層構造が現われ、必要な教育や得られる報酬の等質性と移動パターンのそれとが一致しないことが分かる。ただしこれは45～54歳男子の、2年間の移動という、比較的狭い範囲の像であることに注意すべきだろう。

Breigerの第10章は、E. O. Wrightの枠組に依拠した階級構造抽出を行なっている。まずブルジョワジー、プチ・ブルジョワジー、プロレタリアートを代表する職業をひとつずつ選び、移動パターンの等質性によって職業を分類する。ブルジョワとプロレタリアートの性格を併せもつ中間階級はないという興味深い結果が出ているが、Breigerは慎重にデータの代表性を疑っている。

構造分析なる枠組に何らかの新しさ、ユニークさを期待した場合には裏切られるかも知れないが、階層・移動研究の先端を知るには好適な書といえる。

(鈴木 透)